



9 10 1 2 3 4  
JAPAN  
20 1 2 3 4  
10 1 2 3 4  
30 1 2 3 4  
20 1 2 3 4  
10 1 2 3 4  
9 10 1 2 3 4  
8 9 10 1 2 3 4  
7 8 9 10 1 2 3 4  
6 7 8 9 10 1 2 3 4  
5 6 7 8 9 10 1 2 3 4  
4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4  
3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4  
2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

村忠

羽

金喜

敵討裏見葛葉巻之四

曲亭馬琴戯編

四天王寺小保名両箇の婦をうる附り妖婦

和歌を詠じくその児小別と事

安倍保名い葛の葉を伴ひく阿部野小立つ。また母の妻

否を因小母も幸小恙あらへゆくようどび信太小との一

件のゆきを告る小老母の真葛が信ある志をうれし葛の

紫が小名對面とく言紫の管待ゆくとぞ時小保名のまづく

事あらじよ。正覺庵の接待風爐入りて傳授の秘書を

門  
流  
春  
へ 13  
3102  
4

未だひむつけど玉を涙するより。中途の危難葛のなか  
を抱千枝丸がるまごせ。一五一十を物ぐう。面目あげふえーみ老  
母つぐく笑くうち驚き涙をもくと廢しゆす。あ小因縁  
ある身小影のあがく。彼千枝丸とみんかがみゆく保名  
がむ小疑あ。その板をくらうくばせゆく今茲づく十六年  
のむす。夫保明がもうくわひと生じる男す。朝あ炊  
ども夕の糧小り缺く家の夫さくあり。かくのうどを  
育んす。とももうあかまどことひくえ。あらびき人の門ゆき葉  
をよき。或夜死抱つ。か風のうあくわえ生るかの野の

あちこなる辻堂川西宿せ。猿僧あ。そひこれをみてお  
圖ぬく。う。とのよ。襁褓のうちより父ふくられ命運の微ひ  
このうへあく。さるを富人の門ゆき葉をよくとも久後とくもひ  
ごく。とうく出家人のあく。かく仏の山鼻みともあく。が父  
の後せも安らんと。密小彼旅僧をさ。解く小憩く睡くや  
く。まづその身の小をさる札をつく。和泉國和泉郡舞とある  
とく。や。掲滅く慥よからず。枕のあく。小墨汁あく。とを  
搔く。く。とく。紙小  
い。和泉ある信太の森の楠の千枝小うねく物をこそゆく



すら  
保名が母とひしと死  
夫もかれと死なこまう  
まゆを寝見を那宿  
せー旅僧の後  
不つりふ葉さうり  
かえりと  
千枝丸がくふた

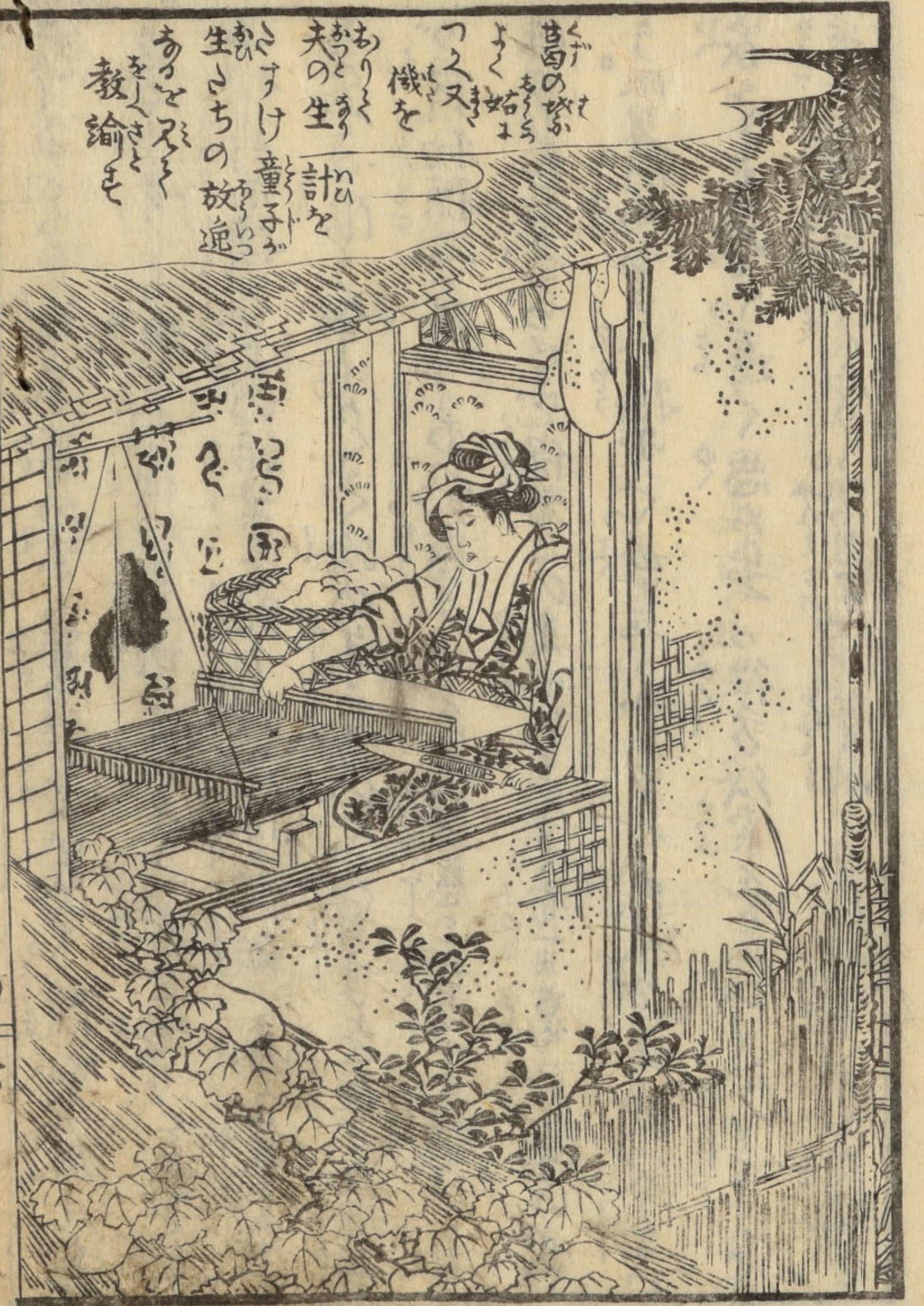


も書ある。まづとも小笈の内小舟一舟。執る。だうりの浪を  
あひて是をかきゆつて。今とては信太ある。向船の舟の破  
をかく。命うへてあらべた祥あり。あはのむを保名。明白  
小告す。遠因ある。人ふ養ふ。生死かちどとせ。親  
あがむ。もふを棄てる。鬼くともられん。恥くさ。小との年來  
匿とまわど。因縁の絲小つあがれ。思ひ歎をきる。ひと語  
やもあ。よど咳入と。保名葛の紫り。小舟を控。勢いと  
湯をまわ。母の歎を推量る。まづ舟もね。歎かく。夫  
婦。小舟をえあひ。と。奇く。縁ある。す。彼千枝。も悪焉

休

愈を行らんとて住吉の神社へ詣づるわしも信太より与勘平た  
び。あく。其の葛がゆ書紙さへ牛どと。保名封皮半一切りと云々を  
も。従ふ。かの夫の菩提の名小尼とありて。諸國を行脚ひて。す  
べ一處不定の方多くゆき。又仇人悪友あつが往方へ。与勘平が索め  
さんといふ。あく。みんと。人小まきを。母のせ小在さん限り。夫婦の  
傳ぐ信す。小音病トぬ。仇人の相貌へ。与勘平。大く認む。あ  
く。保名が索らざん。す。勝るべ。この。ゆ。や。さん。な。小筆下落。一作  
と書く。保名大小鷦鷯。大く姑射髮。大く諸國行脚の志。ゆふ  
ひま。度足。かがる前。小く大字え。あがれを。また。づくじ。

もうひゆ。さりのう。葛の葉。かくと。愛あらば。さと。遺憾。ゆ。くら。め  
は。日く。逗留。せよ。葛の葉。も。住吉。詣。されば。ゆる。小徑。も。あ。ヒ。と。り。  
小。与。勘平。答。く。よ。ひ。と。と。ひ。一。夜。ま。よ。ヤ。つ。れ。ど。聽。ゆ。と。立。生  
か。ひ。ね。それ。が。一。又。死。同行。の人。ゆ。く。真。小。東。園。赴。く。を。然。が。ん  
ゆ。そ。ぎ。一。く。百。も。届。り。が。し。ア。惡。衣。坐。ぶ。往。方。ど。か。定。め。り。り。  
か。そ。き。セ。ヤ。ベ。又。十一。月。城。守。る。とも。音。耗。あ。い。仇。人の。住。处。定。り  
あ。く。ま。ど。と。あ。り。ぬ。と。ひ。ひ。む。か。立。る。を。保。名。も。母。も。う。り。あ。く。届  
じ。ぶ。も。憲。北。小。走。り。去。り。て。影。ひ。く。え。ぞ。あ。り。ふ。く。り。浩。处。(葛)の。芳  
桂。ゆ。う。く。り。御。う。が。保。名。の。生。葛。が。ゆ。書。を。示。く。と。与。勘。平。か



ひきりともを告る。小葛の紫も驚て憂ひあぐ。始の心を痛んとお  
りをく。あくも歎うど。夜は丑ニ過る。病ある。布を織り。糸を苯  
小換薪小換。夫の活業を助け。役小保名へ輒く。母を養ふよ  
ろ。あく限り。うく。次の年。葛の紫が田口子を産す。保名  
が母の初孫の女。あれば慶。うき。慈童子と呼ぶ。母が  
ひとりをも去らざど。保名の光宗を下す。有日。葛の紫がりゆ  
う。肌身の切ある。か抱かく。母もすくとまづいづか。今。書  
家をもあれ。遠く。悪ち歩う。が従方。探索。いと。ひく。か。今。子を  
舉ふ。母の慈愛。あく。心身是れ。と等。用ふ。も。が却く。つ。夫婦を

恨み。娘があとへ。身も童子が絆とあく。以前の。ごく。も。母小  
さく。あく。娘が。わら。又。家を離れ。母の。ゆき。と。あく。と  
とも速小志を遂ぐ。ひと難。晋の藏讓が故本を。做ひ。仇人  
の衣服と。母と。刺し。夫を。その怨を。も。母の。ともか  
う。も。あり。母の。後。謀らん。と。ねり。あく。う。葛の。紫。も  
寧。と。う。と。理。あり。と。う。と。小旅。去年の。夏。正覺庵。わく。彼  
の。まち。う。の。衣服。を。とう。や。ことを。仇人。小換。夫婦。力。も  
く。すく。小。切裂。捨。これ。よう。旦く。旅行。の。み。ば。と。う。と。う。只。加。氣  
神。仏。す。祈念。う。身。旅。放。あく。索。あ。あ。と。惡。右。命。患

かくゆくせぬとも願ふとまづく。さる程小童より生育小きどが  
ひく。毎日小野遊をると。草小く虫をとり。そのあととてう  
又小似されば葛の葉いとひ懲りとす。始て彼を愛むるの  
あらをりく。却く葛の葉をうるおへ程よ童よくのをす  
かくふの隨小舉止。既小七歳小ありて夏保名。母重病終  
す愈まらず。身まづく小たり。夫婦悲しき堪む。厚くこれを  
葬て追薦の佛事のみ。日代めぐる。夏も過秋も九月よりく。  
亡母の中陰も。果小々。保名との夜葛の葉小く。うるおへ  
ト。未いと信や。小看病ちつむ。母が天年を捨てあはれむ。

あひされ。今の人少く。ゆきやうむ。と勘平も。小きらん。の後  
風の便も。あきせ。あくも頼も。これ。縱仇人の画を恐ら。そ  
とも。あくも。列々を。手ぢやんと。童。ゆがみ。よる。小養育  
與。と。葛の葉も。或へう。或へお清く。さく夫が族。うちの  
準備を。ひき。この日母の百箇日。小當で。一ヶ保名の墓事。ま  
ご。父母の尊灵。眼。乞。やさんと。四天王寺の。赴くわ。も。途。小  
ま。と。勘平。少く。ゆき。が。且。驚。た。且。怪。物。を。も。ゆ。ど。わ。ま。り。て  
て。三。の。旅。人。小。行。わ。く。ら。く。あ。あ。小。熟。視。と。葛。の。葉。母  
ま。と。勘。平。少。く。ゆ。き。が。且。驚。た。且。怪。物。を。も。ゆ。ど。わ。ま。り。て  
ら。を。彼。く。も。保。名。と。と。く。又。あ。く。ゆ。き。と。く。彼。れ。づ。背。小。の

らを。もう夫もすまへました。保名答へ。安倍保名。  
あら室へひづる。姫とが妻小を。うぶねどよもその人あり。トより  
。あら。小生葛也。葛の髣髴。行とあく身の毛ひびき。アリ亡魂のまが  
。アリ。小見ゆると。とくへゆく。ひひ生れを。考もあく。只管も  
。アリ。よくなへい。ヤミ。歎う。与勘平。保名をつぐと。怪。ソクセイ。君八年以前。小世  
を。走りぬ。とく見えぬ。あら。ある。あ。肩によが  
。アリ。とく見えぬ。アリ。とく保名ひそく疑ひ  
。アリ。とく。嘗耳元。あら。あ。を。あら。人と。まく。ひふ。  
。アリ。とく。諸四郎脚。小生。ひーとも。与勘平。小告奉。珍  
。アリ。とく。又姑。尼と。あら。諸四郎脚。小生。ひーとも。与勘平。小告奉。珍

ひよの八年むすびのひあらか。もとひかへの空ふく在まく近畿遷倍  
やあひづん又萬の景へ年來づが家ふあり夫婦、中少奉くる童  
トモ今蟲のせざかきりぬことかわめぬうわづりふうをといひ被  
多金をまきこまく。曉らど萬萬の景えひき。身を掌  
以前信太よりうづあ途中。竹のよう打殺されずを。その  
夜勘平が死つて。亡骸を杜ぎてありける。その時の悲歎にゆ  
べてもゆゑど。あくへの煙とひかづ。その日与勘平を阿  
部野へまよふ。母門を迎むならんとや。小母じもとの前日少  
まつりゆひとまく。程よと勘平の近江をうの里へとも小

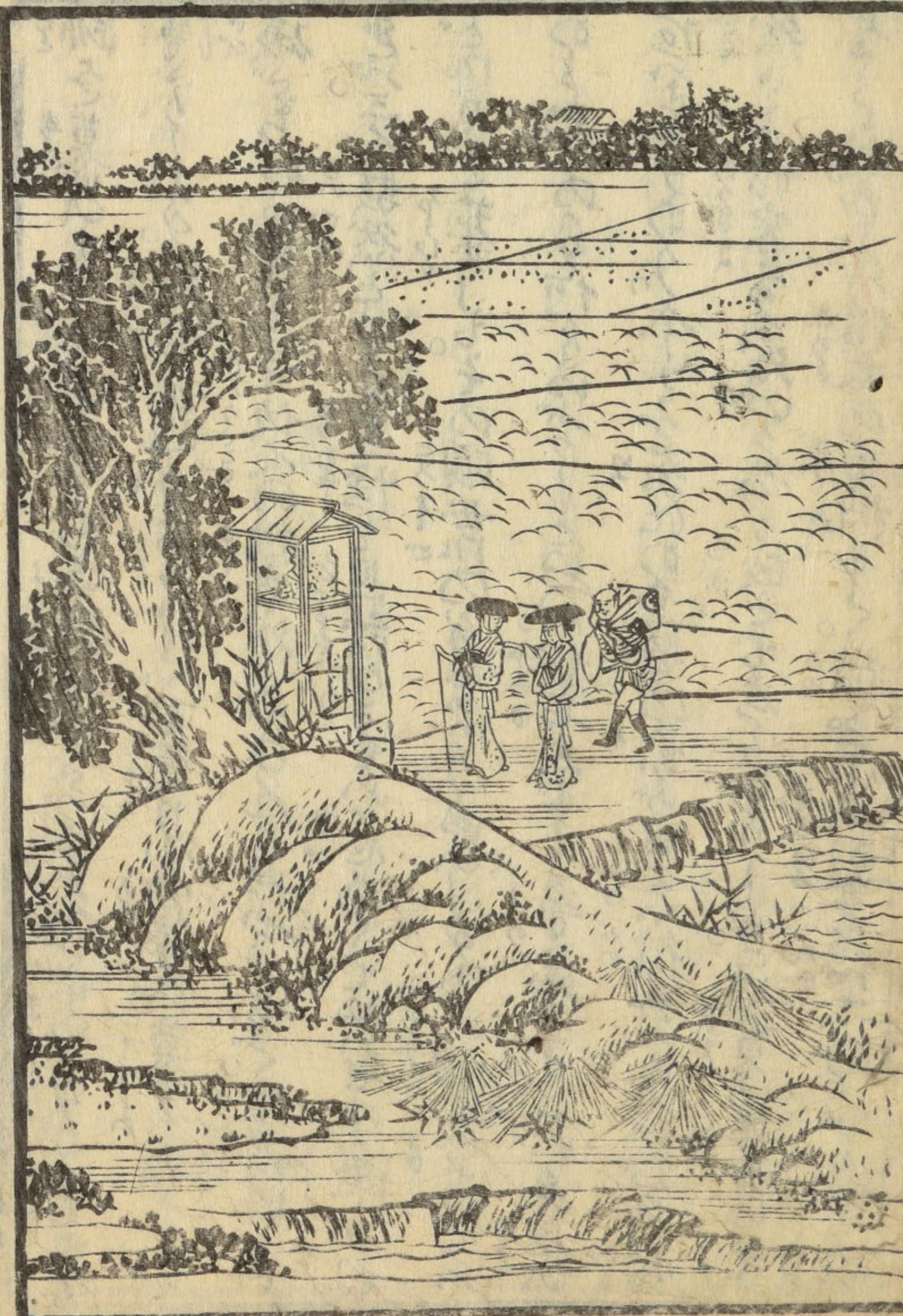
後の夕あどうつせきやく風りぐくふかく。寔ふらはりする物と  
らゆるに持つてまへる。あらんの仮夕追若く母を主従  
え故郷信太を立野く。一ふる諸國の灵場を順れし。ニラモ悪薙が  
ゆく。彼が仇人をもあつまほく。猿小ゆる。八年あり。あるば仇  
人の恩怨あくことの景平在。葛の木も恋よあらま。すまひ奉  
しとひ。更に實古ともなり。とそかへ冥土黄泉の街小わ  
らぶ。保名志く眉を顰。過つる年信太より。而て。危  
難ぬいゆひ。ごと幸小命を隕。さくらる故あり。まく正覺庵  
ゆく。宿セア。祕書をうへ。あひて墨をぬぐりし。葛の木がくづ

跡を慕ひ來。すみちよ勘平がさびのあく。生の葛の書を  
得。うしゆ。近曾母の身あく。百箇日小當とば墓をあく。  
旅のうちのことを告。仇人の往方。ばらみんと。あく。審小物ぐ  
き。三入駭然とく。且怪と曰。詰ひ。悉あく。てゆ。せ。され  
ど。おを葬。その頃母の身あく。あひ。も人は少く。はるひ  
わく。どこの夕何をひぶく。とく。保名志。とく。尋思。とく。これも長  
い。とゆ。今ふる。お。葛の身が。日本。彼身を入れ。只忙  
然なる形容ある。ばらある。故ともあく。ざく。がこ。實の葛の身  
あく。お。信太の白羽。彼身。小人引。信太の人。を譲

まくらすと  
生葛萬の家丈  
よひべい  
与勘平と領  
やあむく  
ハ年う間仇人を  
もむかへ  
索めぐり 権信太へ  
立ちくろとて津国  
を過い おりのそと  
保名不逢ふて立下  
ふどう  
驚き  
あやひ



吉田道喜著



まくそれの途みち小走あそる体から小走あそを。又勘平よんぺいをも離はなりまく。さがぬさがぬ  
をの頃ごろまくらまくらとゆりへせ。又おもと勘平よんぺい小妹わいわい。姑おば尼おばなとあり  
。行脚あんげ志しめりと偽うそとうそと信太あかだの通路こうろを絶き。おのじ葛くずの巣巣  
あり。こぶが家いえ小走あそりむくると驚おどろく。さきど彼かれがこの年來母おや信  
あり。こぶが家いえ小走あそりむくると驚おどろく。さきど彼かれがこの年來母おや信  
くくあらへる。ひくべきやうもあくび。まづまづ方にあみひく。徳とく小  
覗くわい窓まどとひく。が生う葛くずホ三人さんじんをトとやく。晴はるり。うちつむぎちくとの家  
小走あそを。保名ほなのまづ庭門にわの門おりまづ。物の蔭かげ小走あそ。汗あせめ息いきもだべ  
くく。窓まどの居ゐ。うくと生う葛くずの糸いとを勘平よんぺいの保名ほな門門より見みる。  
のこの家いえふのやさん。住吉すみよしのうへりづくと。うむひく。走はしる。

伏ふ伏ふ向むか小走あそり。布織ぬのおり。の様原おもさまを右う手てと。三町さんまちむかへ  
より。西にし起おきたぬ。住吉すみよし街道かいどうありとい。戸とも姿すがも行ゆ佛ぶつと。の葛くず  
紫むらさき小露こめら。さづつと。こづつと。彼かれ。彼かれ人ひと。又またある。と疑うそひ。まどまど。が母おやの  
生う葛くずも。与よ勘平よんぺいも。透とおせの間ま。覗くわい。不ふ能のう。程ほど。人のもの。小  
幅ひろく。歩あると。が。走はしる。と。も。小走あそり。退のて。又また覗くわい。彼かれ。久く。  
小潘こはん保名ほな。と。只管ただまん呆あき。と。まどまど。と。く。と。も。小走あそり。退のて。又また覗くわい。彼かれ。  
寝ねくる童わらわ子こが。裾きぬ。風かぜ引ひせ。と。あうち。彼かれ。セ。と。う。子この。顔おほを。へく  
と。お。あ。が。と。同おなまへ。同おなまへ漏あひる。涙なみだ落おち。と。う。と。拭ぬぐ。と。手て。胸むねの  
と。迎むか。を。や。往むか。と。年とし。と。童わらわ。と。う。と。小走あそ。と。夢ゆめ。と。今いま。母おや。と。人ひと。遺おとす。と。



妖婦  
葛の娘か真の  
葛の娘  
おやこかゆ  
おれ子をちり  
羞く一首の和歌  
を遺す  
信太の  
恵へ

書はるる。墨子

の葉をとよく摘みて又以て告げらる。又彼人へもばえよ  
恥じやうとせん人間ある。畜生の群れづきの信太ある。森ふと  
狩り獵あつむ。矢田部定邦小二顆の御城集ね。神力も竭さ  
かべ。九万八千の眷属ふとくとをもざれる。朽木一木忽地邪念が  
起し。定邦の愛妾安本代あつて。惱せ。天の罰や蒙り。恩をか  
かく。心をかく。死などばつりをゆりひ。保名どぶ助はらき碎く  
一顆のまぶたを。遂に軽く拾ひんと。お底のうね。さふ。一木び恩を  
報せんと。影守をあらび付添。小和泉路。危難の時葛の家  
どあ。名を借りて。今抱く。まあ。まわせ。小うらふゆひる。悪をう

行包ある。名前からうれ。この人彼人を魅。縫小夫婦の申を裂  
く。これこの家小有明の寝覈く。のうへひふすあく。舉て。要を  
の浅く。年月のこゝだら程引ひと。とよひのあらむ。と。  
今既小縁盡く。實の葛の紫母子の衆との地へ。うまゆを。あ  
阻んも罪あく。假初あく妹夫の中を。八年以来遠け。ことを憎  
と。おもと。おもと。今えふ。ぬむ。ゆう。おも。小倭文の草  
環う。う。見る様の梭を。あら。よと教め。おも。小ゆうねど。  
けすう。葛の紫どのを。産の母に。と。う。猶の子と。野小鷦  
草に入り虫を吹能。おもと。ありまそ。足の名を。汚さべ。

忠孝とひがひ聖の經小載め。誠の道へとけ入らう。日  
を他小女び人の鏡とひがひを磨く外も。別とひが一日も。  
悲ひのを是ひと。今みせ生をうそあひてゐるのをひが  
諏訪の冰の中絶て夫婦親子のうそと霜。半八声の鳥あくび鳴  
ゆきとよつゆきと遠びくと腹念あくに寝鳥をうねがあく  
はまともあやゆみともあや。とぞうやせんとあたはせの  
義理と恩心愛ひ人向よりもあく。あくの焼野の雉子夜の鶴辟言ふ  
りとぬ身の果を。あくわとせりとと声をく。あくと泣音かね  
少童子も嘗てむづきがきひくをく庭門より。うと入る保名外

ある葛の葉母と勘平も走り入るが眼前見え一瞬かと忽ち小  
跡もとあひ声もせよど出居の障子からくわうり。

高ととく。ぬねむ。がむ利泉ある。信太の森の。もの。やね。世ふ  
と書。遺。と。葉。の。ぬ。あ。と。も。拙。う。ど。ぞ。う。を。下。る。草。の。お。い。母。と。だ  
小。弟。が。く。童。子。を。抱。た。揚。さ。ま。く。賺。く。ら。の。れ。ど。蛇。が。あ。う。や。そ。面。影  
ゆ。く。仰。れ。ど。も。あ。う。と。と。が。小。實。の。母。と。も。昌。ね。だ。母。さ。ま。づ。ば。で  
母。さ。ま。と。あ。内。声。さ。ま。う。泣。す。の。り。泣。ぬ。保。名。も。恩。愛。の。か。あ。り。う。う。と  
葛。の。ち。か。も。角。か。つ。よ。さ。し。く。哀。別。の。や。ま。く。か。き。を。推。量。す。す。や  
姿。か。く。と。も。馴。眠。ま。ね。い。母。の。ぐ。く。う。す。ひ。ろ。よ。あ。る。親。と。ま。う。が。一。世。の

それまであるわれを只顧慕ふもとまうあう。せんくの子が十  
あり。ほり立つてある程の養育しやくぶつ。元の舊巢へり  
い姉ちゃんやとひきかへて一妻少わくかぶがおなが名を面す  
と。但とく七年八年あまり始むかづく。操正へくそが夫よ赤眉  
ゆると圓くらん。あと憎くとも姉へとも。うぶたうとの児も。うが産の子  
小異ある。赤心を告る。ぬくび形を顕く。のうすく目え  
ゆく。このうがづうは説べ母のま葛からぬとも。うそくがね  
も初孫と。うがいとど可愛さみ。とひうれす。うは血をうけく産玉  
ノクのを捨てゆく。名残のことぞ惜うる。と果てあるまく病歎

が。と勘平も感激。拳ぐ杖く波く巻く鎧纏ゆ。と。う。保  
名じね回歎息。と。人間あるぬ身ゆも。再生の恩ゆるりゆを。  
されへ却くと。も。及くと母の在せ。と。う。思ゆ  
。と。身と。身と。仇人をも。身と。化小年月を。と。う。と。身と。  
を贈らば。彼も又自在を。と。今よりの。と。身と。明向小所  
あらん。輒く仇人を討す。わらん。さ。が。う。童。と。身と。  
信太の森へ。と。う。と。身と。身と。身と。葛の。と。母子も。う。と  
小。と。身と。を。保。名と。や。と。今人を。代。伴。と。彼。又。恥。と。身と。身と。



志をす。笛をくせりとて。ひそく家をゆづる。おぼつらま  
くも赴む。さて保名の童子を携む。もうへ信太の森小到る  
小頃しも九月中旬。菊芭花咲み。楠の枝も風小音一と招  
く薄もろがら。とちるわうねうとつう。ど虫の声のみ。あら童  
みの声をかう。ちく。母さまでづばで母はあう。喃々と囁ど叶ど只詠  
のこ回答せり。保名の母彼此をえんげ。さく。小景。ふと見  
ねば今ひととく昌ひきえ。お代恥く跡をつく。とく理ある。どもし  
せなど稚なりのがかくぞう。慕るをどうぞや。われひべく笑べ  
れとあり。うへふも幻もし見えのうへとかの向。霞と煙くる鬼

少不意えくら。うが後方。か立在り。のめん。童子忙しく走り  
す。母は高へそりて。おや。おがむす。室をくとく抱つけ。うのを。  
よ童子。それ母はく母はく。今より實の葛の葉。うのを。  
母とくつまく孝行せよ。えくが夫を。彼を。きつこな贈らんと。お母せど  
あひ。男がよより。それを。受く。うが物あが。盜小等し。只定邦。う先  
非を悔く。彼より。うと時をまへべ。されど碎くる一顆の玉。ハ明泉  
えく。よ復り。こゑを種る。うと年少。ぬく。じ完あり。う。虫  
の恥を雪ふ足れり。さて嚮す。哀別。かく。かく。いへだすも  
ひきう。抑仇人恩苦樂。原田原手情。が心腹の家隸。小近。太郎

逸澄とひきのあり。千晴滅とく。不必死を脱れ。町内圍籠。畠  
小隠れ住と。君の怨を報せんともすと。小定邦とれをあらま。  
招に。彼もつ定邦代討と所領を押集ひ。小夏役起さんと  
しれども。千枝丸の男色ふる比まだひより。信太庄司のねいそとの行  
計をえあらはさりと。終小志を遂む。庄司を切害し。和泉路より  
播州小遊り。不圖も金鳥玉兔簾簷内傳茶瓶尼天の法書を  
あらわす。芦屋の里小居をわく。陰陽師とあり。姓名伏羲。芦屋  
道満と号す。このゆゑもあらせよ。くらひれど。彼あ母運  
命の竭ざるふらふく黙止せり。あらわ小播州芦屋の領主藤原清方

あく道満を尊信し。此度帝の脳のん禱のる召傳り。上洛せり  
べ。彼の時を幸い。小帝脳平愈のん禱と。うやく。瀬調伏志奉  
らんと謀る。内房急だ。洛小より。加茂光榮小就く。のゆを訴朝  
歎道満を討く。舅と弟の冤をも重ね。の功をもく絶てる家と  
起一の。あれども。この時小當アとく。大。禍あり。その禍却く福と  
ある。あらかじ。憂かとく。小足とぐ。ひびたる。只見の。みうれ  
懃小その人の面影。小そのれ。こと。夫。わらすも恩愛の絆とある  
あらむ。見て。といひ。わ。ぞ。艶あり。し。弱女の姿を。白  
痴と。変じ。一方をうづうづ。跳つ叢の中。うれしへ童子もさ

まづ小駕かうた怕むを保名ほめの只忙ただいそと夢路ゆめぢを出でてぞくあり告處ごじよ  
生ま葛く葛くの禁きん与勘平げんべいの保名童ほめのどみづみづとあくそとの跡あとを  
追おく阿部野あべのより來くり保名ほめの彼かれへ小向貌おほむかひを告ごき仇かう  
人の爲体ためたいを説示せつしまし小三入こさんにゅうのれきとれきとく。あくび。欲よくび。あつれ  
さもて信太しんたの郷きへ戻もどり。年とを孫まごへ朽くままう。舊ういの宅いぢをり  
拂はづく。入いる。小こす懷舊くわいきの波なみをひざむ。



敵討裏見葛葉卷之四 異

